

Title	貨幣の銘文に反映されたチュルク族によるソグド支配
Author(s)	吉田, 豊
Citation	京都大学文学部研究紀要 = Memoirs of the Faculty of Letters, Kyoto University (2018), 57: 155-182
Issue Date	2018-03-10
URL	http://hdl.handle.net/2433/229558
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

貨幣の銘文に反映された チュルク族によるソグド支配¹

吉 田 豊

0 はじめに

玄奘 (602-664) は 629 年に中国を出発し、630 年に中央アジアを經由してインドへ向かった。630 年の雪解けを待ってタクラマカン砂漠側から天山を越え、熱海(イシュククル)を通過してチュー川の流域に入った。ここはセミレチエとも呼ばれる。『西域記』のなかで「自素葉水城至羯霜那國。地名宰利。人亦謂焉。文字語言即隨稱矣(素葉城から羯霜那国に至るまで、土地は宰利と名づけ、人も「宰利人と」いう。文字・言語もその名称に随って「宰利文字・宰利語と」称している)」と言っている。²彼の素葉は、『唐書』では碎葉と表記され、どちらも *Suyab* を音写している。現在のキルギス共和国の首都ビシュケクの東 60 キロほどのところにある地名である。また宰利はソグドを意味する中央アジアの梵語形であり、羯霜那のほうは「キッシュ(現在のシャフリサブズ)の」を意味するソグド語の形容詞 *kšy'n'k* の音写形である。玄奘は、アクベシムからウズベキスタンのシャフリサブズ(実際にはその南の鉄門)までがソグド人の土地、言い換えればソグド語圏であると理解していた。この地域がイスラム化する 9 世紀までの時代、ソグド人たちはたびたびチュルク系の遊牧民の支配を受けることになった。もっとも単に支配されていたのではなく、ソグド人たちもまた、彼らの武力を利用して交易による利益をはかっていたことはよく知られている。一般にソグ

¹ 本稿は、2014 年 11 月 21-23 日イスタンブールで開催された国際シンポジウム (International Symposium on Sogdian-Turkic Relations) での口頭発表に基づいている。なお、本稿では「コイン」と「貨幣」を区別なく使っている。

² 『西域記』の原文は『大正新修大藏經』51 卷, p. 871a10-12 から。翻訳は水谷真成訳『大唐西域記』中国古典文学大系 22, 平凡社 1971, p. 20 から。

ド人と遊牧民の共生と呼ばれる現象である。³

そんな時代のチュルク系の遊牧民に関わるソグド語の銘文を持つ貨幣がかなり知られている。本稿では、ソグド語圏の東よりで遊牧民の本拠地に近い地域である、セミレチエすなわちチュー河流域の地域とタシケントで見つかるコインの銘文に注目して、チュルク系の遊牧民のソグド支配の跡をみとめることにする。本稿で扱うコインは、ほぼ全点、収集家でありまた貨幣学者でもある平野伸二氏が所蔵しているものである。貴重なコレクションの利用を可能にして下さった氏に謝意を表したい。

正規の発掘によらず、骨董市場で購入されるコインの学術的な価値についてはしばしば議論される。筆者はこの問題について定見を持っているわけではないが、慎重に扱わなければならないことは承知している。ただこと本稿で扱う貨幣に関する限り、1点を除けば、別に出土が確認され地元キルギスやウズベクの研究者によって発表され研究されているものであり、その真贋は問題にならないと考えている。平野氏の所蔵するものは比較的保存状態が良く、銘文を読む上では他のコインより有利であるということが、本稿でそれらを利用する理由である。

1 セミレチエのコイン (1) : wn'ntm'x コイン = Km. 39-44⁴

この項で扱うコインは、銘文を読む際に保存状態の良いコインがどれほど重要かを示す良い例になるだろう。かつて筆者は、内藤みどり先生が、アクベシムの西にあるクラスナヤレチカの遺跡発掘時に入手されたコインの実物を見せて頂いたことがある。(図1 = Km. 40) 保存状態の良いこのコインの銘文を読み解くことは比較的容易で、筆者は wn'ntm'x xwβw 「領主 Wanantmāx」と読んだ。人名の wn'ntm'x は「勝利神である月神」というほどの、ありふれた構成のソグド語人名であり、マニ教ソグド語文

³ 突厥やウイグルのような草原の覇者による上からの支配以外に、この地域に半定住したチュルク系の民族との横の関係も見逃せない。この点については補論を参照されたい。

⁴ 本稿で扱うセミレチエのコインは、A. Kamyšev, *Rannesrednevekovyj monetnyj kompleks Semireč'ja*, Biškek 2002 に於いて付与された番号 (Km.) で呼ぶことにする。本稿で wn'ntm'x 貨幣と呼ぶものは、そこの 39-44 番 (= Km. 39-44) にあたる。ちなみに Kamyšev はそれらを「tuxusy コイン」と呼んでいるが、それは従来の呼び名を踏襲しているためである。

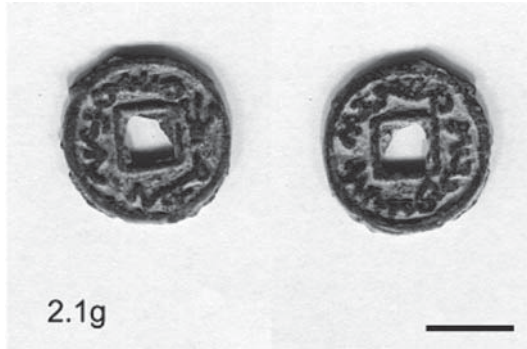


図 1

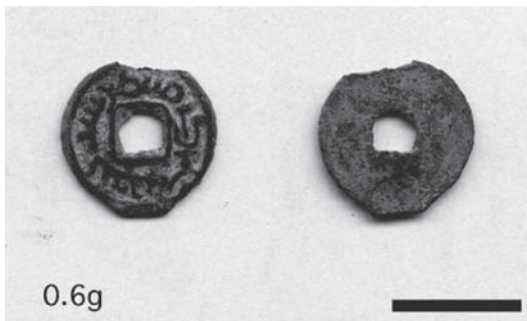


図 2

献の奥書にも見えている。⁵ なおもう一方の面は、いわゆるトゥルギシュのコインと同じ銘文で、 $\beta\gamma\gamma\text{ twrkyš x'γ'n pny}$ 「神なる突騎施の可汗の銅貨」と読める。

その後筆者は、このコインの銘文が、ソグドコインの専門家である O. I. Smirnova によって txws'n'k xwβw 「Tukhus の領主」あるいは txwsš xwβw と読まれていることを知った。一般には Tukhus コインとして知られており Kamyshev が使う呼び名もそれに依っている。Smirnova は twxs の部分は、10 世紀のイスラム史料に現れる、この地域に居住した民族の一つ Tukhs に対応すると考えていたわけである。⁶ この銘文に対しては、他にも次のような種々の読みが提案されている： twxm'x , wγ'tmnk , p'tm's , tγ'wms ,

⁵ 筆者の銘文の読みはその後発表されている (Yoshida 2000, p. 85 及び注 22)。マニ教文献の奥書は最近 A. Benkato (2017, pp. 103, 105-106) によって再研究されている。これも含めて、ソグド語文献に現れる人名はすべて P. Lurje (2010) において収録されているので便利である。この人名は Lurje 2010, p. 404, no. 1315 に収録されている。ちなみに平野氏所蔵のコイン (図 2 = Km. 44) では、裏面に銘文はなく、表の銘文は wnntm'xy xwβw のように読める。斜格形の語尾 $-\gamma$ が添えられている。

⁶ Smirnova (1981, pp. 60-61) 参照。Tukhs については Minorsky (1970, pp. 297-300) も参照せよ。

wy'tmns, w'γwm's, wy'tmyš, wytm'y, p'tmyš (Lurje, *ibid.*).⁷ これほどまでに種々の読みが提案されるのは、個々の文字の形式が合流したり、互いに区別しにくくなった草書体のソグド文字が金石文には不向きであるからである。草書体のソグド文字で書かれた金石文を、かつて Henning (1958, p. 56) はドイツ語で *traurig* 「お粗末、痛ましい」と表現しているほどである。コインの銘文はその最たるもので、保存状態の良いコインから銘文を読むことの重要性は強調してしすぎることはない。

上でも述べたように、このコインのもう一方の面には βγγ twrkyš x'γ'n pny という銘文がある。片面にこの同じ銘文、もう一方の面に弓形のタムガを示すコインは、8世紀の前半のトゥルギシュの可汗によって発行されたものである。(図3)⁸ 西突厥の流れを汲むトゥルギシュは、セミレチエを本拠にして広く中央アジアを勢力下に置いた。最盛時の可汗は蘇祿(在位 715?-737/8)で、ソグドや東トルキスタンでも見つかる質の良いトゥルギシュのコインは、蘇祿のものであるとする Thierry の説は正しいであろう。⁹ このトゥルギシュの貨幣の質の高さは、トゥルギシュが勃興する以前に碎葉鎮にいた中国の工人たちの技術力に帰するのが妥当であろう。ここで取り上げた wn'ntm'x のコインとの質や重量の差異は歴然としているから、同じように片面に βγγ twrkyš x'γ'n pny の銘文を有する両者のコインの間の関係が問題になる。Smirnova (*ibid.*) は、

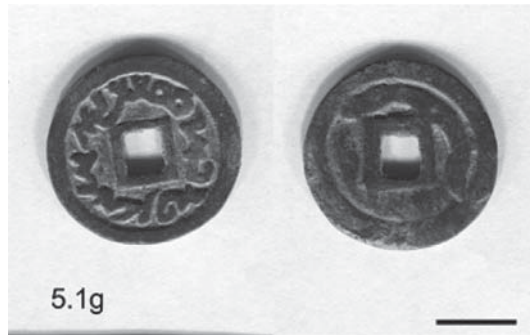


図 3

⁷ 最後の3つは Thierry の提案する読みであるが、それらについては下で論じる。ちなみに Lurje (*ibid.*) は筆者の読みを支持している。

⁸ トウルギシュのコインにはいくつかのタイプが知られている。ここに示したのは F. Thierry (1999) のタイプ II である。

⁹ Thierry (2011) 参照。この論文では、トゥルギシュの歴史も詳しく論じられていて便利である。

当時知られていた発掘状況から、wn'nt m'x コインはトゥルギシュのコインに先行する時代のものと考えていたが、現在ではこの考えは採用されていない。¹⁰

Thierry (2011) は、筆者が wn'nt m'x およびそのヴァリエント形式のコインに見られる同一の名前に対して、3種類の名前 (wγ'tmyš, wγtm'y, p'tmyš) を読み取りこの問題を検討している。¹¹Thierry は、これらはチュルク語の人名であり、蘇祿以降に登位したトゥルギシュの可汗の名前だとしている。彼によれば、質の悪いことや、発見される場所の広がりかセミレチエに限定されていることから、彼らが支配する地域は広くなくその支配力は蘇祿にとうてい及ばなかったという。しかし筆者が明らかにしたように、銘文はソグド語の名前を示しているから、支配者はソグド人であったと考えられる。おそらく、蘇祿以降弱体化したトゥルギシュの緩やかな支配下にあった、ソグドの都市国家の支配者が発行したコインであったのだろう。

wn'ntm'x 貨とは別に、片面にトゥルギシュのコインと共通するタムガを示すコインで、もう一方の面の銘文が xwt'w wxšwt'wy pny 「領主 Waxšutāw の銅貨」と読めるものがある。(図4) Waxšutāw は「オクサス神の力」を意味するありふれたソグド語の人名であり、このコインもまたトゥルギシュの緩やかな支配を受けていたソグド人の

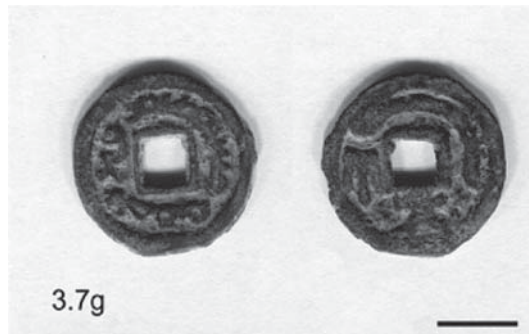


図4

¹⁰ Smirnova の理解については護雅夫 (1992) も参照。この考えの背景には、セミレチエの中国式の方孔銭の伝統は、サマルカンド周辺から移入されたと想定されていたことがあったのであろう。この Smirnova の年代観に基づいた護雅夫の説は、現在は問題にならないだろう。セミレチエで見つかる方孔のない貨幣については下記を参照されたい。

¹¹ 実際のところ、彼が p'tmyš と読む語は、確かに p- で始まっているように見える。ただこれは劣化した鑄型のせいであろう。Lurje (ibid.) はどのコインでも筆者の読みを採用している。

領主が発行していたものであろう。¹² トウルギシュのコインとの類似性は *wn'ntm'x* 貨より著しく、それに先行する時代に属しているようにも見えるが、出土状況などが明らかになっていないので、両者の関係は筆者には不明である。

2 セミレチエのコイン (2) : カルルクのコイン

トウルギシュに続いてセミレチエで勢力を持ったチュルク系の民族はカルルクであった。カルルクはウイグルと共同して、742年に突厥第二可汗国を滅亡させた後、今度はそのウイグルに追われて西方に移動した。751年のタラス戦に参戦したのは有名であり、その頃にはセミレチエ付近に居を定めていたようだ。『新唐書』によれば、カルルクは大暦年間(766-779)に強勢になり、トウルギシュを制圧したという。¹³ この当時のカルルクの動静は、敦煌出土のチベット語文書にも言及がある(森安2015a, p. 61)。その後カルルクは吐蕃と共謀してウイグルと戦ったが、かえってウイグルの第7代懐信可汗(位795-808)に制圧された。そのことを記録したカラバルガスン碑文の記事は下で見ることにする。

そのカルルクのコインが、ピシュケクの近くの Shish-tube で出土するコインの中に存在することを最近 Lurje (2010, pp. 219-220, no. 588) が確認している。幸い平野氏も所蔵しておられるのでその図を提示する。(図5) Lurje は当初、片面を $\beta\gamma\gamma\ x'rlw\gamma\ x'\gamma'n\ pny$ 「神なるカルルクの可汗の銅貨」、もう一方の面を $kwp'k(?)xwt'w$ 「領主 Köpāk」と読んでいた。筆者が解読したトルファン出土の662/3年の文書では、カルルクを表す形式が $xr'r'w\gamma$ と表記されていることから、筆者は $x'rlw\gamma$ ではなく $xr'lw\gamma$ と読むべきであると提案し、現在はその読みが採用されている(Lurje 2013)。コインの銘文の文字の読みはあいまいなので、正しい読みがこれで確定したとは言いがたい。¹⁴ 9世紀初め

¹² この名前を Lurje は $w'xšwt'w$ (cf. Lurje, *ibid.*, p. 406, no. 1306) と読んでいる。しかし $wxšw$ 「オクサス」はソグド語の人名の要素として頻繁に見られるので、筆者の読みの問題は無い。 $wxšwt'w$ コインの一つのタイプ (Km. 36) は、片面に prn 「栄光、吉祥」、もう一方の面に $xw\beta w(sic)wxšwt'wy\ pny$ とある。なお Schmitt (2017) は最近、「オクサス神」を構成要素に持つイラン語の人名について論文を発表している。

¹³ 佐口透他(訳注)『騎馬民族史2』平凡社1972, pp. 298, 443 参照。

¹⁴ ちなみにこの新しい論文では、 $kwp'k$ を $pwp'k$ と読んでいる。



図 5

のカラバルガスン碑文のソグド語版では, $xrl-wy$ と表記されていることも注目される。¹⁵ また文字 l を示すために文字 r に添えられた補助記号の形式は, このコインではソグド文字の場合と同様, 小さい点のように見えるが, カラバルガスン碑文のそれは後の時代のウイグル文字に見られるような大きなフックであり, 後続の文字と続け書きされていない。その点では下で見るコインの $yy'l-xr$ の場合も同じで, ウイグル文字と同じ大きなフックになっている。この補助記号の形式の違いをどのように解釈するかも問題である。

$kwp'k/pwp'k$ とカルルクの可汗との関係について, Lurje (2010, pp. 219-220) は, 可汗の名前か, 可汗に従属する者の名前であるとする。このコインにおける $kwp'k/pwp'k$ とカルルクの可汗関係は, $wn'ntm'x$ とトゥルギシュの可汗の関係と並行するので, 後者の解釈を採用するほうが良いように思われる。Lurje が当初考えたように $kwp'k$ がチュルク語の名前であれば, 彼はカルルクに制圧されたトゥルギシュのリーダーであったのかもしれない。Lurje は後に $pwp'k$ と読んでソグド語の人名と見なしたが, それが正しければ $wn'ntm'x$ 同様, カルルク支配下のソグド人の首領が発行したコインということになる。

3 セミレチエのコイン (3) : ウイグルのコイン

平野氏のコレクションを調査していたとき, 興味深いコインに遭遇した。(図 6 =

¹⁵ カルルクの漢字表記と, それが反映する原語の名称の形式との関係については, 筆者の議論も参考にされたい (吉田 2007)。

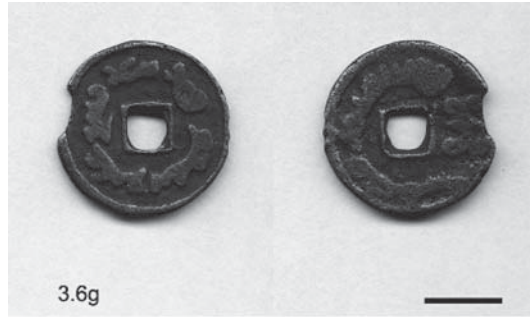


図 6

Km. 35) コインの保存状態は良好で、銘文の読みはそれほど難しくないように思われた。Kamyshev は片面を *x'y yn'l 'nyr xwβw pny* と読み “Lord Xay-Inal-Anir's fan” と訳し、¹⁶ タムガのある面の銘文を *βγγ twrkyš x'γ'n* つまり「神なるトゥルギシュの可汗」と読んでいる。Kamyshev の本に掲載された鮮明ではない挿図からでも、タムガがある面の銘文に対する彼の読みは不可能で、銘文は 2 語からなり、*βγγ* に対応する語は見当たらない。筆者自身は片面を *γγl'xr xwβw pny xcy* 「(これは) Yaghlaqar の王の銅貨である」、タムガのある面の銘文を *prnxwnty wβ't* 「幸ありますように」と読んだ。¹⁷

Yaghlaqar は、第 6 代までのウイグルの可汗を輩出した一族の名称である。タムガがある面の銘文は、よく知られたウイグル語の定型句 *qutluγ bolzun* に対応する。この定型句はかつて Bombaci (1965, 1966) が詳しく研究したことでも有名である。動詞 *β(w)*-「～になる、～である」の接続法 3 人称単数形の *wβ't* は、マニ教文献に特徴的な形式で、第 3 代牟羽可汗 (位 759-779) 以降国教となったマニ教との関連もうかがわれる。要するにこのコインは、モンゴル高原の東ウイグル可汗国のものと考えてのが妥当である。それ故、セミレチエでなぜこの名称を含む貨幣が見つかるかは興味深い問題である。むしろ、偶発的な発見物をもとに壮大な歴史的背景を想定することは許されないが、第 8 代保義可汗 (位 808-821) のときにオルホン河流域のウイグルの都に建てられ、ルー

¹⁶ fan は漢語の「分」を表記しているが、「銅貨」を意味するソグド語の *pny* が、漢語の「分」に由来するという説は、今は過去のものとなっている (Yoshida 1996)。

¹⁷ 後に Lurje (2010, p. 432, no. 1400; idem, 2013) も *γγl'xr xwβw pny xcy* の読みを発表していることを知った。しかし彼は、タムガがある面の銘文に関しては、文字が鮮明ではないとして Kamyshev の読みを踏襲している。また本稿で論じるような歴史的背景についても考察していない。

ン文字ウイグル語、漢文、ソグド語の3言語を用いたカラバルガスン碑文には、ウイグルとセミレチエとの直接の関連を示す記録がある。また、おそらく821年にウイグルの都を訪問してその時の記録を残した Tamīm ibn Baḥr も、セミレチエ方面からウイグルが設置した駅亭を利用してモンゴル高原に向かった (Minorsky 1948)。

カラバルガスン碑文のウイグル語面は破損して殆ど利用できないが、漢文版とソグド語版はそれぞれ全体の3分の1、4分の1程度が残っていて、貴重な記録を読み取ることができる。二つの言語のテキストで、比較的によく残っているのは第7代懐信可汗(位795-808)の偉業を述べる部分である。そのうちのソグド語版の20行目を見よう。そこには懐信がセミレチエのカルルクを制圧したことを伝えている：¹⁸

(1) ()krtw δ'rt (x)[wt]y CWRH ptw(y)sty xrl-wyty 'nβr(z)-kr 'l-pw yncw pyl-k' ypγw nyšyδ twγ ZY n'm δ'βr ZY m(yδ) ()'st(ny)k tw[rk(2)y]š x(w)β x'γ-n ky pr δs' p'δ 'δry twrkyš 'xš'w'nδ'r wm't ZY ...

「彼は…にした。自ら我が身を差し出してきたカルルクたちのお目付役¹⁹として Alp Yinčü Bilgä 葉護を据え (= 任命し)、纛と名前 (= 称号) をあたえた。そしてこの十の矢の三(姓)トルギシュの支配者であった本来のトルギシュの領主である可汗を…」

筆者は当該の論文の中で、この部分の歴史的な背景について以下のように推定した：「この部分はカルルクを攻めて西部天山地方にウイグルが勢力を伸ばしたとき、降伏してきたカルルクに対する処置と、この地方にカルルクの西遷以前から居住していたトルギシュの可汗への処置(おそらくもう一度可汗にしたこと)を述べた件であろう。」筆者が "stnyk と読んだ語は「本来の」を意味し、西部天山地方の正統な支配者は、西突厥(十姓=十箭)の流れを汲むトルギシュであるというウイグル側の理解を示す表現として興味深い。漢文版の21行目の次のパッセージに対応するのであろう。筆者と

¹⁸ テキストと翻訳は筆者の論文(吉田2011)から引用した：テキスト中の(1)と(2)は、碑文の断片の番号である。(丸括弧)は文字が一部破損していることを、[角括弧]は破損部を補っていることを示す。

¹⁹ 'nβrzk は通常「大臣」と訳されるが、'nβrz は「配慮、世話」を意味するので、ここでは文脈を考慮して「お目付役」と翻訳した。

森安が作成したテキストを引用する：(黒) 姓毘伽可汗。復，與歸順葛祿，冊真珠智惠葉護，爲主。又十箭三姓（突騎施）＜後続部分は欠落している＞。

漢文版の20行目には、チベットとカルルクの連合軍に対して、「追奔逐北，西至拔賀那國（敗走するのを追跡し，西に向かってフェルガナに達した）」とあり，Yoshida (2009) はコータン語の文書を援用して，これがカシュガル付近で勝利したウイグルがさらに西方のフェルガナ方面に，チベットとカルルクを追いやった事件を表していると考えた。その年代はコータン語文書により802年頃であったこと推定される。モンゴル高原から中央アジアの草原地帯を勢力下に収めた東ウイグル可汗国は，840年頃にキルギズの手によって崩壊するから，セミレチエ地域もその頃にはウイグルの影響から脱したと考えられる。従ってこのコインは，9世紀の初めにここにもたらされたものであろう。さらにカラバルガスン碑文の記事から，たとえ名目的なものであれ，ウイグルによって一時期トゥルギシュの可汗の支配が復活したことが判明する。第1節で見た *wn'ntm'x* コインは，もしかしたら復興したトゥルギシュの時代のものである可能性もあるが，この点は不明として将来の研究にゆだねたい。

3-1 セミレチエで見つかる他のコイン

東ウイグル可汗国のものと考えられるコインが見つかり，その銘文がソグド語で書かれていることは，従来から知られているウイグル語の銘文を持つコインが，東ウイグル可汗国時代のものか，西ウイグル国時代のものかという議論にも影響する。平野氏のコレクションの写真を図7 (= Km. 55) として掲載する。このコインは近年 Thierry (1998) によって詳しく研究されている。Thierry による銘文の読みは以下のようであり，一般にも受け入れられている²⁰：片面 *kwyl pylk' tnkry pwxwx 'wyγwr x'γn* 「Köl Bilgä Tängri Boquq Uyγur 可汗」；もう一方の面 *'yl twtmyš yrlyynk' (il tutmīš yarliγinga)* 「Il Tutmīš (可汗) の命令により」。このコインの年代については意見が分かれている。Thierry は，Boquq が第7代ウイグル可汗懐信の名前であることから，そ

²⁰ このコインを巡る議論については森安 (2004, pp. 21-22) を参照せよ。なお *pwxwγ* (Boquq, Boqug, Buquγ, etc. と転写される) が牟羽可汗か懐信可汗かについての論争があるが，筆者は Thierry や森安同様，第7代可汗懐信可汗に当たるという一般的に受け入れられている説を支持している (森安 2015, pp. 547-553)。

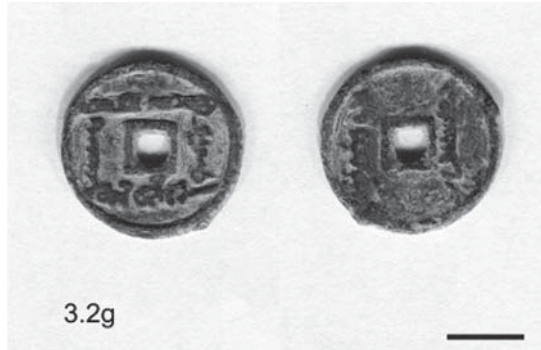


図 7

の時代に発行されたものだと考えた。羽田亨はコインの形状から宋時代のものと見なすのが妥当だとして、西ウイグル国時代に比定した。森安（2004, pp. 21-22）も羽田説が穏当だろうとしている。

今回、東ウイグル可汗国時代のコインの銘文がソグド語で書かれていたことが判明したことによって、ウイグル語の銘文を持つ Boquq 貨幣は西ウイグル国時代のものであると説がさらに有力になる。その場合西ウイグル国時代のコインが、カラハン朝の領土であるセミレチエでも発見されることについても議論が必要であろう。²¹ 最近になって西ウイグル国時代、11 世紀の初めに書かれたマニ教ウイグル語の文書の奥書に、タラスの領主の名前が見えていることが知られるようになった（森安 2015, pp. 599-604）。²² 吉田（2017）も明らかにしたように、カラハン朝と西ウイグル国は互いに敵対していたが、人の交流や交易は存在していたのであり、西ウイグル国の貨幣がカラハン朝の領内で発見されたとしても何ら不思議ではない。

Boquq 貨幣が西ウイグル国時代の貨幣であるとする、なぜ西ウイグル国が発行するコインに、東ウイグル可汗国時代の懐信（位 795-808）の名前が書かれるのかも問題になるであろう。これまでの研究で、ウイグルでは 6 代可汗までが Yaghlaqar 家出身であったのと異なり、懐信は Ädiz 家出身であることが知られている。彼はいわば Yaghlaqar 家の養子になる形で可汗の位を継承した。そしてその活躍で、吐蕃に対して

²¹ Kamyshev 氏からの個人的な情報によれば、セミレチエではウイグル語の銘文 (idūq y(a)rliŋ yorizun 「神聖なる勅令が行き渡りますように！」, 森安 2004, p. 22) を持つもう一種類のコインも発見されている。

²² この奥書は最近 Zieme（2017）によっても研究されている。

劣勢であったウイグルの勢力を盛り返しさらに拡大した。従って彼が可汗の位を継承したとき Yaghlaqar 家自体は存続したが、先代の可汗の一族は唐に追い出された形になっている（森安 2015, pp. 5-7）。そのようなわけで、懐信はウイグルの中興の祖であると同時に新生の第二ウイグル可汗国の祖でもあり、それを継承する西ウイグル国の実質的な始祖であったことになる（吉田 2011, pp. 16-17）。Yaghlaqar 家自体は存続していたのだから、懐信以降の時代の東ウイグルのコインに Yaghlaqar の名前があっても不思議ではない。なお東ウイグル時代のコインの銘文がソグド語である一方で、西ウイグル時代の銘文がウイグル語であるという事実は、ソグド文字を用いてウイグル語を表記する伝統が何時始まったかの問題にも一石を投ずることになるであろう。

今まで見てきたように、カラハン朝以前の時代にセミレチエで発行されたコインは基本的に中国式の方孔銭であるが、方孔のないコインも知られている。（図 8 = Km. 20）片面には王冠ではなくフリギア帽風の帽子をかぶり耳飾りをつけている人物の胸像がみえる。銘文は胸像の左に βyy「神（のような主）」、右に prn「栄光」と書かれている。もう一方の面にはタムガが見える。セミレチエではトゥルギシュ銭以降、方孔銭が発行されていたのであるから、このタイプのコインはトゥルギシュ銭以前の支配者によって発行されていたと推定されよう。このような帽子はソグド語では s'rtp'w, 漢文では薩寶（薩保, 薩甫）と呼ばれるソグドの商人のリーダー格がかぶる帽子である（Kageyama 2005）。それ故、これはトゥルギシュの貨幣に先行する時代にセミレチエに植民し、そこの共同体あるいは都市国家のトップであったソグド商人が発行したコインではなかろうか。銘文のソグド文字の書体は遅い時代のものではなく、その推定と矛盾しない。ソグド商人が建設した植民都市としては、康艷典が貞観年間(627-649)



図 8

にロブ・ノール地域に建設したものがよく知られている。

4 ウスルーシャナとタシケントのイルテベル貨幣

筆者が調査した平野氏のコレクションの一つは、従来知られていないコインである。(図9) その片面は痛みが激しくて本来何が打刻されていたか分からないが、もう一方の面にはタムガと銘文の大半が見えている。後に装飾品になっていたらしく、小さい穴が穿たれている。タムガはウスルーシャナのものであり、このコインはウスルーシャナの王が発行したものであることが分かる。類例と比較すれば、破損した面には鳥翼冠をかぶる王の胸像があったのであろう (cf. Smirnova 1981, pp. 324-335)。銘文は、反時計回りで4時から2時にかけて MR'Y(= xwβw, xwt'w)「領主, 王」が見え、それに続いて奇妙な文字列がある。1時から11時にかけて 'y-(r)t と読める文字があり、その後には w ないしは p と読める文字、さらにその後には 'y が続きその後ろの文字は摩滅して判然としない。この 'y(r)tw/p'y[.] はかつて筆者が解読した、トルファン出土の女奴隷の売買契約文書で、639年に比定できる文献の冒頭に見える 'yrtp'yr という語を想起させる。冒頭を引用しよう: srδ'w 'my cyn'ncknδ'y y'(n)cyw βγw RBkw 'yrtp'yr w'n 10-wxwšw srδ 'z「年はチーナンジカンス (= 高昌国) の延壽の神なる偉大なイルテベル王の16年であった」。²³

『旧唐書』「西突厥伝」によれば、統葉護 (位 618?-628) の時代西突厥は支配下の国々



図9

²³ 日本語の訳文は Yoshida (2003) をもとにした。

の王に頡利發（イルテベル）の称号を与え、可汗から派遣された吐屯（トドン）が監視・統理したという。²⁴これが実際にそうであったことが、この契約文書の文言から確認できる。すなわち高昌国の王で延壽の年号を使っていたのは魏文泰（位 624-640）だが、彼は漢語の「王」以外にイルテベルの称号を持っていた。従って、ウスルーシャナの王もまたこの時期イルテベルの称号を持っていたと考えられ、MR'Yの後の語は'y(r)tp'y[r]と読まれることが分かる。銘文は9時から7時にかけて摩滅していて読めないが、ウスルーシャナを意味する形容詞が期待されるので、[ʼstr](w)šny-kwと補われるであろう。ちなみにムグ文書に在証される語形は、'stwršnyk および'strwšnkである（Livshits 2015, p. 174）。銘文全体は[ʼstr](w)šny-kw MR'Y 'y(r)tp'y[r]「ウスルーシャナの王（であり）イルテベル」と読まれることになる。おそらく西突厥時代のウスルーシャナの領主が発行した銅貨であったのだろう。

西突厥支配下の王が発行したコインにイルテベルの称号が見つかることから、他の王たちが発行したコインにこの称号が使われていないかが問題になるだろう。²⁵かつてタシケントで見つかったコインの銘文を Shagalov and Kuznetsov (2006, pp. 128-132) は pny tk' ryttpyr c'cyнк xwβw と読み“Coin tk' ryttpyr of Chach's ruler”と翻訳している。（図 10）²⁶ムグ文書には ryttpyr および dyttpyr と表記される語形が見つかっていて、B. Marshak はこれを ilteber と結びつけていた（cf. Lurje 2010, pp. 336, 386）。このコインの銘文全体の読みは確定していない。筆者自身は ynk' ryttpyr c'cyнк xwβw pny あるいは ynk' ryttpyr c'cyнк xwβw pny と読み、「これはイルテベル（の称号を持つ）タシケントの王の銅貨である」と訳すことを提案する。²⁷

タシケントで見つかるコインの銘文に c'cyнк「タシケントの」が現れるものは他に

²⁴ 『騎馬民族史2』平凡社 1972, p. 214.

²⁵ 実際のところ、下でも見るように銘文に ilteber にもとづく疑似梵語形 hitivira を含むコインが、ヒンドゥークシュの南側で発見されている（Sims-Williams 2007, p. 272b）。ただこのコインは西突厥の本拠地から遠く離れた地域で、8世紀に発行されたコインであり、筆者が扱っているコインとは全く異なる歴史的な背景を想定させるので、ここでは問題にしない。

²⁶ 平野氏のコインでは、右半分の銘文が見えない。ここでの筆者の読みは Shagalov and Kuznetsov 2006 の図版を参考にしている。

²⁷ ynk()の部分は難問である。筆者は 'yn'k「これ、この」の崩れた形と考えた。Lurje (2010, p. 386) は y-nk-y と読んで、チュルク語の yangi「新しい」と結びつける提案をしている。



図 10

も 2 種類知られている。一方の銘文は ZNH pny tk'yn c'cynk xwβw 「このコインはタシケントの領主, Tegin (のものである)」と読める。(図 11) Tegin は「王子」を意味するチュルク語であるが, コインの銘文に支配者の称号として現れることに関しては以下に引用する『隋書』「西域伝」の石国(タシケント)の記事が参考になる: 射貴可汗興兵滅之, 令特勤旬職攝其國事(標点本 p. 1850)。つまり射貴可汗(位 610-619?) のとき, 石国の王は殺され代わりに tegin の称号を持つ者が支配者になった。実際コインの片面には, 弁髪(フナヘ)の突厥人の胸像が打刻されている。

銘文に c'cynk を示すもう一方のコインも興味深い。(図 12) こちらのコインの片面



図 11

には王冠をかぶるソグド人の姿が見える。その銘文にはいくつかの読みが提案されている: knycyr c'cynk xwβw “Kanichur Chach's ruler” ~ pny 'krty c'cynk xwβw z/nyrt “Coin produced by Chach's ryler Z/Nirt” (Shagalov and Kuznetsov 2006, pp. 151-152)。



図 12

しかし knycyr の読みは不可能であり，後者のほうが優れている．ただ 'krty は動詞であり，ソグド語では動詞は文末に立つから，銘文は c'cynk で始まっていたはずである．筆者が提案する読みは次の通りである：c'cynk xwβw 'yrt-pyr 'krty 「タシケントの領主でイルテベル（の称号を持つ者が）作った」（あるいは）「タシケントの領主がイルテベルになった」.²⁸

確かに残された文字の形と比べたとき筆者の読みが，とりわけ優れているわけではないが，筆者の読みは上で見たウスルーシャナのコインの銘文からも支持されるように思う．

ウスルーシャナ： [str](w)šny-kw MR'Y 'yrtp'(y)[r]
 タシケント： c'cynk xwβw 'yrt-pyr 'krty

かつて筆者はタシケント地区で見つかる別のコインの銘文を解読したことがある．(図 13) Rtveladze (1997/8, pp. 327-328) は当初この銘文を c'cynk Myr'y nwnšyr のように読んでいた．²⁹ 筆者はそれを批判し，最初の語を c'c'nn'pc 「タシケントの人民の」と読み，全体を c'c'nn'pc wwnw xwβ 「タシケントの人民の領主 Wwnw」と読んだ (Yoshida

²⁸ 二つの解釈のうちどちらが優れているか判断しにくい，上でも言及したカピシのハラジの支配者のコインの銘文は前者を支持する：śrī hitivira kharalāca paramēśvara śrī śāhi tiginā deva kārīta(m) “minted by Śrī Hitivira Kharalāca, overlord, Śrī Śāhi Tigin, the Deva” (Yoshida 2003a, pp. 156-157).

²⁹ 後に Rtveladze (2006, p. 3-44) はこの読みを放棄し筆者の読みを採用した．



図 13

2002, pp. 189-192). その際 c'c'nn'pc という形容詞は、このコイン同様古風な文字で表記された2点の銀器の銘文にも見えていることを指摘した。その後 Sims-Williams et al. (2007) は、カザフスタンの Kultobe 遺跡で見つかった非常に古い碑文に、やはり c'c'nn'pc という形容詞が見つかることを指摘した上で、タシケントのコインで筆者が xwβ「領主」と読んだ語は、実際には人名の一部で、その人名は wnwrxwr と読むべきであることを明らかにし、筆者の読みを訂正した。

ところで c'c'nn'pc も c'c'ynk もどちらも地名の c'c「タシケント」から派生した形容詞であるが、³⁰ 違いは何なのだろうか。書体から前者が後者より古い形式であることは明らかである。従って古くは c'c'nn'pc と言っていたものが、後に c'c'ynk に取り替わったことになる。その歴史的な背景は不明だが、筆者は上で引用した『隋書』で、西突厥の射貴可汗は、在地の王を廃位して突厥人を支配者に据えたことを伝える一節がヒントになると考える。c'c'nn'pc は「タシケントの人民 (n'p) の」という意味であり、その支配者は専制君主というより、民主的に選ばれた支配者と認識されていたことを示唆するだろう。タシケントは西突厥に先行する時代には、エフタルの支配下にあったと考えられるが、その支配は西突厥に比べて緩やかであったのではないだろうか。コインの片面に打刻された支配者のプロフィールの、ディアデム及び額の上に見える三日月形の装飾、大きく見開いた目のモデルは、エフタル支配下で発行された、いわ

³⁰ チュルク語では「石」を意味する語が taš であることから、タシケントは漢語で石国と呼ばれることになったという憶説がある。実際には、[tāʃ] は原語の [tʃāt] の初頭と末尾の子音の異化により成立したもので (Minorsky 1970, p. 357)、本来チュルク語の「石」を意味する語とは無関係である。

ゆる Alxan コインの支配者像に求められるかもしれない。³¹

5 おわりに

本稿ではセミレチエとタシセントで見つかるイスラム化以前のコインに反映された、突厥、トゥルギシュ、カルルク、ウイグルによる支配を跡づけようとした。コインの銘文の読みは研究者によって随分違っており、なかなか一致を見ないというのが実情である。筆者の提案する読みが、そのような状況の打開に向けた一歩になり、単にまた一つの新しい読みを追加しただけにならないことを切に希望すると同時に、今後新たに発掘される資料によって正しい読みがみつかることを期待したい。実際、新しい資料は発掘されつつある。2011年10月8日にウズベキスタンの G. Babayarov 教授と、キルギスの K. Tabaldiev 教授は、Sogdian-L のサイトで新発見の陶器の銘文をアップされた。khum と呼ばれる大きな瓶の縁に刻まれたその銘文を、二人は [M](N) / ['](t) xw't'wy MYLK'y bdnkt / blnkt pry tkyn ... と読み “From / To the Lord, the ruler of Badankat / Bulankat (to) the Fri-tegin ...” と英訳された。その翌日に Sims-Williams 教授は新しい読みと解釈を投稿された。Sims-Williams 教授のほうは、[...] (.) xwt'wy myδk'y kδ'rt wrytkyn と読み “[So-and-so] made [this khum(?)] for(?) Lord Methak, Uri-tegin ...” と訳された。Sims-Williams 教授が myδk'y と読み人名と見なした語は筆者には myδkry 「時代、日々」のように見えるので、筆者は、[...] (.) xwt'wy myδkry kδ'rt wrytkyn と読み、「…王の時代に Uri-tegin が作った」と訳すことを提案する。破損した部分に王の名前があったのだろう。もう少し保存状態がよければ、その地域の当時の支配者の名前や年代を知ることができたかもしれない。そしてその名前がコインの銘文から知られている名前と一致する可能性を排除できない。

³¹ Alxan コインについては、とりあえずアルラム (2017) を参照せよ。F. Grenet apud Sims-Williams et al. (2007, pp. 1025-1031) は、タシセントのこのコインの年代をずっと早い時期に比定している。

補論 1：ソグド人と土着化したチュルク人との関係

上でムグ文書に *rytppyr/δyttpyr* という語が在証されることを指摘した。西突厥が滅亡した後の 8 世紀前半のムグ文書における *rytppyr* はどのような存在であったのかについて、一つの文書を翻訳することによって解説してみたい。この文書は A-16 で、紙に書かれた手紙形式の命令書である (Livshits 2015, pp. 115-118)。そこに書かれた日付は Grenet and de la Vaissière (2002, p. 177) の研究により、西暦 722 年 7 月 28 日に比定されている。

- 1 MN sy-wδyk MLK' sm'rknδc
- 2 MR'Y δyw'sty-c 't prm'nδ'r
- 3 'wtt δrwth γrβ nm'cyw
- 4 rty nwkr 'YK 'M mn' n'mk
- 5 pcwzy rty ZKn xy-sw ry-ttppyr
- 6 'yw βwδxwrt'kw mδw δβry'
- 7 w'nkw ZY ZKh knc'kt xwr'nt
- 8 rty 'pstnh L' kwny-' rtenn
- 9 ZKw p'ry-kw t'py rtšw m'yδ
- 10 xns w δ'ry-' rty 'm'yδ n'mkw
- 11 ptsxw δ'ry-' 'YKZY ZKn MLK'
- 12 δy-w'sty-c 'δw srδ "z m'xy
- 13 xwry-zny-cy myδ nγrn'-rwc
- 14 rty tβty ZNH n'mk ZKn
- 15 MLK' δy-w'sty-c ZY np'xšty
- 16 py-šn'my-k pr MLK' pr m'n'h

「ソグドの王、サマルカンドの領主デーワシユテイーチュから、王命執行者³²のウトへ。

³² 筆者が「命命執行者」と翻訳するのは *prm'nδ'r* という語で、王から派遣されて王の命令を執行する者のタイトルである。

健康（であれ）、何度も敬礼を（送る）、さて今私の手紙を受け取ったら、（チュルク人の）若い衆たち³³が飲むために、奚素（突厥）のリトビールに美味しい葡萄酒を一つ与えるように、そしてぐずぐずするな、そしてその（葡萄酒のうちの）残りを封印するように、そしてそれをとてもしっかりと保管するように、そしてこの手紙を領収書として保管するように、デーワシュティーチュウの第2年であった。（日付は）フワルザニチュ月のナグラン日、この手紙はデーワシュティーチュウによって封印され、（保管用の）複写は王の命令により書かれた。」

この時期、ペンジケントのデーワシュティーチュウ王は、ソグドの王サマルカンドの領主の地位にもついていたが、迫り来るアラブ軍と激しい戦闘を行っていた。筆者は手紙の中の *xysw* は玄奘が奚素突厥と呼んでいる、ペンジケント側からヒッサル山脈を南に越えた地域（往時の *Akhrūn* と *Shūmān*、現在のドシャンベ付近）にいたチュルク人の集団であることをあきらかにすることができた（cf. *Yoshida apud Grenet and de la Vaissière 2002*, pp. 177, 190, n. 77）。ムグ文書の *ryttpyr/δytpyr* はすべて、この同じ人物を指している。この比定により、デーワシュティーチュウ王が、奚素突厥からの援護を受けてこの戦闘を有利にしようとしていたこと、そのためにこの手紙では彼の王命執行者であるウトに、奚素突厥の従者たちを上質の葡萄酒でもてなすように指示していることが判明するのである。最終的には奚素突厥はアラブ側についたことも知られている、*Grenet and de la Vaissière (2002, p. 177)*。

ムグ文書おける *ryttpyr/δytpyr* は従って、西突厥時代の *ilteber* とは異なり、土着化したチュルク系の遊牧民の首領を指す語になっていることが分かる。また、この時期の土着化したチュルク系の遊牧民の集団と、イラン系の王はいわば対等の関係でもあった。³⁴ 玄奘の時代から100年を経た8世紀の前半にも、このチュルク系の集団が存続し続けていることも興味深い。

³³ *Livshits (2015, pp. 116, 180)* は、この *knc'kt* を “*maidservants, servant-girl*” と訳している。彼は *kncyk* “*young girl*” と同じ語と考えたようだ。むしろマニ教ソグド語の *knck* “*boy*” やキリスト教ソグド語の *qncq* “*child*”, *qncy* “*young man*” と比較すべきであろう。チュルク語の *kānč* 「若者」は、ソグド語からの借用語かもしれない。

³⁴ 残念ながら上で見たタシケントのコインの *ryttpyr* がどのような地位にあったかは分からない。

補論2：セミレチエ地域を表すソグド語名？

本稿では冒頭で、セミレチエ地区で出土したコインを扱ったが、ここではこの地域をソグド語でどう呼んだかの問題について考えてみよう。ここで出土する零細なソグド語の金石文に地名らしきものは見つかっていないが、漢文の歴史書やイスラム時代の地理書には、この地域に存在した都城や河川の名前が記録されている。めぼしいところを挙げれば、碎葉：Sūyāb, 米国：Banjkath, 新城：Navīkat, 白水城：Isfjāb などである。³⁵興味深いことに千泉（イスラム史料の Mīrkī）の現地語の呼び名は玄奘の『慈恩伝』によれば屏聿（中古音 *b'ieng iuēt）であるというが、これは突厥語（古代チュルク語）の *bing yul 「千の湖」に当たる。ソグド語でも同じ意味を持つ *zār xāx と呼ばれていたようだ（Henning 1946, p. 716）。あるいはむしろ本来ソグド語の名称が存在していて、それに対応する突厥語の呼び名が Bing Yul, そしてその意味を取った漢語の名称が千泉であったのであろう。

しかしながらこの地域全体を表すソグド語の名称は知られていない。また、この地域から中国にやってきたソグド人たちが帯びた漢字の姓も確認されていない。この問題を解く鍵となる資料が見つからない以上、状況証拠から推測あるいは憶測するしか手立てはないのであるから、およそこの問いを發すること自体に学術的な意味はないようにも思える。ここで敢えてその問いを發する理由は、候補となるかもしれない地名や姓が知られているように筆者が思うからである。それはソグド語で twrkstn と呼ばれる地名であり、漢字の姓では翟槃陀のような人名に見られる「翟」がそれである。

twrkstn のほうは、筆者が解読したトルファンのアスターナ出土の女奴隷を売買する契約文書の5行目に、当該の女奴隷が、'wyh twrkstny z'tcwh 'wp'ch 「twrkstn 生まれのウパーチュ」だと言われているのが初出である。この契約文書は西暦639年に書かれている。この文書を發したときには、文字通りトルコ人の住む場所を想定し、twrkstn は「天山山脈の北側、シル河からモンゴリアにまで至る広大な草原地帯」に当たると考えていた（吉田・森安他 1989, pp. 14-15）。

最近になってコータンで發見されたソグド語の手紙文が何通か發表されたが、その

³⁵ 米国の比定に関しては吉田 2001 を参照せよ。

中の一通にも、twrkstnが見られる。これらの手紙は800年前後のものと見なされているが、正確な年代は分かっていない。その一方で、書体や内容から判断して、この時代判定は受け入れられるものである。この手紙での文脈は上記の契約文書より限定的で、以下のような文脈に現れている。この部分は、手紙の中で地名が集中して現れる部分であるので、参考のためにやや長めに11行目から18行目までのテキストと英訳を引用する (Bi and Sims-Williams 2015, pp. 262, 266).

11/ ... kδry 'z-w 12/ mnxwyw ZY γyšypw-kyn wβw ZY yw'r L' sywδw s'r xrtym 13/ L' kw twrkst^{sic} s'r rty L' twpytstn s'r rty tw' 14/ "ycw kwts'r prm'rz (β)rtδ'r'm 'šm'xw xypδ w'βy "ycw MN δst' 15/ xrtty 'sty wβyw x(w)mt'n wβyw kw γ'yγwr s'r 'nyw twrkstn 16/ 'nyw kw swγδw s(r r)ty prm'rz L' 'krty rty cw mn' nβ'nt 17/ "ycw 'sty rty prm'rz 'yt'k 'krty 'zw kw prw'n s'r xrtym 18/ rty kw 'šm'xw (s'r) δ(ykh) pr'šyw MN prw'n δykh pr'šyw "11Now I 12have been broken and have suffered harm. But I did not go to Sogd, 13nor to Turkestan, nor to Tibet. (As for) your 14goods, wherever I brought (your) profits(?), the major (part of) your goods 15has gone(?) out of (my?) hands, both (to) Khumdan and to (the) Uygur(s), also (to) Turkestan, 16-17also to Sogd, and a profit(?) was not made (for you)(?). Whatever goods there are with me, a profit(?) was taken (for you)(?). I went to Parwan 18and I sent a letter to you. I sent a letter from Parwan."

Bi and Sims-Williams 2015, p. 268 は、twrkstnが指示する地域として、上で引用した吉田・森安の考えに言及するのみである。ただこの手紙には、他にswγδw「ソグド」、twpytstn「チベット」、xwmt'n「長安」、γ'yγwr (or x'yxwr?)「回鶻(ウイグル)」, prw'n「アクス」をあげており、twrkstnはそれらの場所ではなかったことが知られる。この手紙が800年頃に書かれたとすれば、γ'yγwr「ウイグル」はモンゴリアを指していたと考えられるから、モンゴル高原がtwrkstnに含まれていない事が確認される。

筆者は、漢字によるソグド人の姓に関する論文で、齊藤達也(2009, p. 2110)が提案する一つの仮説を読んで以来、翟姓のソグド人はtwrkstn出身ではないかと考えるよ

うになった。斉藤によれば、康や安のような北朝期以前から使われている姓と、ソグド人専用に新たに作られた米姓以外は、基本的に中国に既存の姓を選び、選ぶ際の基準は、選ばれた漢字の姓の発音とソグド語の地名の発音の関連であるとする。例えば Kish の場合、史姓が選ばれるが、それは sh [ʃ] と「史」の発音の類似性ということになる。タシケント出身者が帯びる石姓は、タシケントの原語である c'c [tʃätʃ] の [tʃ] と「石」の初頭音の類似性が背景にあるという。³⁶ ソグド人の姓ではないが、コータン出身者の姓である「尉遲」の例がわかりやすい。隋から唐初の画家の尉遲跋質那・尉遲乙僧父子が有名である。しかし尉遲は、『元和姓纂』巻10に、「与後魏同起，号尉遲部，如中華之諸侯。至孝文時改為尉氏」とあるように、もとは鮮卑系の部族の名前であって姓としても使われていた。斉藤（2016, p.36）によれば、7世紀から8世紀にかけて、コータン人の姓として「尉遲」が定着した。コータン出身者が尉遲を名乗ったのは、コータンの王家の名前である viji'da, viša', višya', etc. との発音の類似性がその背景にあったと推定される。

このように発音の類似性は程度の問題であって、厳密な発音上の一致が前提になっているのではない。そのような前提で翟の中古音と twrkstn を比較すると、翟の発音には twrk「突厥，チュルク」あるいはソグド語内部のヴァリエント形 trwk との類似性は確かに存在している。翟には2種類の発音がある。Karlgren 1957 のシステムでは、*d'iek（ピンイン di）と *d'ek（ピンイン zhai）のように再建される。どちらの場合も原音と一定の類似性を有している。敦煌文書に見られる姓としての翟の発音は *d'ek（ピンイン zhai）であったらしいから（Yoshida 1993, p. 367）、後者の発音で発音されていたのかもしれない。その場合には声母の *d-（澄母）は反り舌音であり、trwk の初頭音を写すには適切であったかもしれない。³⁷

翟姓に関しては最近になって榮新江と羅豊という、二人の中国を代表する唐代史、中央アジア史、ソグド人史の研究者が共同で論文を発表している（榮・羅 2016、特に

³⁶ 石の中古音は *ziäk だが、その声母は変則的で、トカラ語に借用された液量の単位の「石」が cāk と表記されているように、破擦音 [tʃ] としても発音されることがあった。吉田 1994, 307-306; Sims-Williams and Hamilton 2015, 38.

³⁷ 「トルコ」を意味する形式の初頭音が有声でもありえた点に関しては、Lee and Sims-Williams 2003, pp. 168-169 及びそこで引用されたチベット語の drug, drug-gu, dru-gu も参照せよ。

pp. 293-299). 結論は翟姓のソグド人は、今のブハラの北西約 50 キロのところにある、漢文史料で戊地（『新唐書』）あるいは伐地（『西域記』）と表記され、イスラム史料では Vardana と呼ばれている場所の出身であって、翟（ピンイン di）はその第 2 音節の初頭音を写しているとしている。

古代の地名の比定に現代の漢字音を参考にすることは既に問題であるが、それ以外にもこの比定には疑問があると考えられる。翟姓のソグド人は、漢文史料には相当数確認できるが、漢文史料で見る限り戊地はそれほど重要な都市には見えない。その近くの Paykand はイスラム史料にも取り上げられる重要な商業都市で、発掘によっても重要性は確認できる。ここの出身者が帯びた畢姓のソグド人は、翟姓と比べれば少数である。試みに、李方・王素編『吐魯番出土文書人名・地名索引』北京 1996 を検索すると、翟姓の項では 94 名分の人名をあげるが、畢姓の人は一人も収録されていない。たとえ翟姓を帯びた人間のすべてがソグド人であるとは限らないとしても、その差は歴然としている。この点も翟を、Vardana のような地名と結びつけることに問題があることを示すだろう。それとは別に戊地、伐地に関して、筆者は別に研究ノートを発表している（吉田 1993）。そこでは玄奘の伐地は戊地の誤写であり、『新唐書』「西域伝、康国」の戊地は『魏書』の牟知と同じ地名を指し、ソグド語の地名リストで、一般に Nāf Nāmag と呼ばれている文献で mwt'yk と表記された地名に比定できるとした³⁸。

従来翟姓はトルコ系の北方の遊牧民の姓とみる見方が一般的であったが、中国におけるソグド人の活躍についての研究が盛んになった 1990 年代頃から、次第にソグド人の姓とも見なされるようになり、昨今はソグド人の姓の一つだとする説が主流あるいは定説になっている。筆者自身もそれを疑うつもりはない。ここで二人の共同論文に言及する理由の一つは、翟姓のソグド人を特定の地域あるいは都市国家と関連づける十分な証拠が、漢文史料に通暁した中国史の間でもまだ明らかになっていないことを如実に示すと考えたからである。逆に言えば、翟姓のソグド人がセミレチエ地域出身であることを示す積極的な証拠も見つかっていないが、それを否定する証拠も見つかっていないということである。ここでの議論をまとめれば、仮に twrkstn と

³⁸ そこでは、『新唐書』の火尋国の項では、同じ地名が戊地とも表記されていることも指摘している。

呼ばれる地域がセミレチエに対応していることを示すことができれば、翟姓のソグド人はセミレチエ地域出身であったという仮説、あるいは少なくとも作業仮説は、承認されないまでも排除はされないであろう。

最近 M. Dickens (2014) は、東方教会（いわゆるネストリウス派）の総司教であった Timoty I (780-823) が書いた書簡に、彼の時代にトルコ人の土地（Beth ʿTurkayē）に大司教区を設置したという記事を取りあげ、それが、780-783年の頃であり、当時カルルクが支配していたセミレチエ地区であると主張している。筆者もその説は正しいと考えるが、セミレチエが西側から見て「トルコ人の土地 = twrkstn」と呼ばれていたことを示すと言える。³⁹興味深いことに Beth ʿTurkayē と併置される Beth Hinduwāyē「インド」、Beth ʿŠināyē「中国」、Beth Tuptāyē「チベット」は、ソグド語で接尾辞 stn を伴って表現される：ʿyntwkwstn, cynstn ~ βγpwr-stn, twpytstn。⁴⁰このことも、twrkstn と Beth ʿTurkayē を同一視することの妥当性を示唆するように思う。

ソグド商人に関する de la Vaissière の著書には地名の Turkestan を含む史料がいくつか引用されている。そのうちの一つはアルメニア語史料、7世紀の Širak の Anania の『地誌』で、そこには「ソグド人は Turkestan と Ariana の間に住む」としている、de la Vaissière 2016, p. 145。この史料は Turkestan がソグドのすぐ東にあったことを示している。また9世紀の終わりに中央アジアにイスラム教を布教した al-Hajjāj の伝記の「Māwarānahr から Turkestan さらに Mā Sīn にまで行った」を取りあげ、その Turkestan は Bālāsāghūn であり Mā Sīn は Beshbalik であるとする注釈に言及している、de la Vaissière 2016, p. 285。Bālāsāghūn はカラハン朝の首都であったのであり、セミレチエ地域にあったと言える。さらに Narshakhī の『ブハラ史』では、伝説時代のブハラの支配者 Abrūī の圧政に耐えかねて dihqān たちが移住した先が Turkestān と ʿTarāz（タラス）であったという逸話を伝える。彼らはそこに Jamūkat という町を建設したが、それはタラスの近くだという、de la Vaissière 2016, p. 105。これも Turkestan が漠然と「トルコ人の土地」を指すのではなく、セミレチエが含まれる限定された地

³⁹ この表現におけるシリア語 beth の意味については Dickens (2014, p. 118, n. 11) に議論がある。

⁴⁰ 上で引用した手紙にみえる twpytstn 以外の語の出典などは Gharib 1995 を参照せよ。中国の名称については大秦景教流行中国碑のシリア語版の ʿsynst'n も参考になる

域を指示していたことを示すであろう。

以上、ソグド語文献における *twrkstn* はセミレチエ地区を指示し、そこ出身のソグド人は中国では翟姓を帯びたという筆者の仮説とその根拠を述べた。この比定は「消去法」的に行われており、直接的な証拠は見つかっていないことは筆者自身が承知している。ただ榮新江・羅豊（2016）と同じ程度には考慮に値する説だと考えている。

（本研究は日本学術振興会科学研究費基盤（C）15K02515：研究課題「ソグド語金石文の総合的研究」の援助を受けている）

参考文献

欧文

- A. Benkato, *Āzandnāmē. An edition and literary-critical study of the Manichaean-Sogdian Parable-Book*, Wiesbaden 2017.
- Bi Bo and N. Sims-Williams, "Sogdian documents from Khotan, II: Letters and miscellaneous fragments", *JAOS* 135.2, 2015, pp. 261-282.
- A. Bombaci, "Qutluy bolzun!" (part 1), *UAb* 36, 1965, pp. 284-291, and (part 2) *UAb* 38, 1966, pp. 13-43.
- É. de la Vaissière, *Histoire des marchands sogdiens*, 3rd ed. Paris 2016.
- M. Dickens, "Patriarch Timothy I and the Metropolitan of the Turks", *JRAS*, Series 3, 20/2, 2014, pp. 117-139.
- B. Gharib, *Sogdian dictionary*, Tehran 1995.
- F. Grenet and É. de la Vaissière, "The last days of Panjikent", *Silk Road art and archaeology* 8, 2002, pp. 155-196.
- W. B. Henning, "The Sogdian texts of Paris", *BSOAS* 11, 1946, pp. 713-740.
- , "Mitteliranisch", in: *Handbuch der Orientalistik*, 1. Abt., IV. Bd.: Iranistik, 1. Abschnitt: Linguistik, Leiden 1958, pp. 20-130.
- E. Kageyama, "Sogdians in Kucha, a study from archaeological and iconographical material", in: É. de la Vaissière and É. Trombert (eds.), *Les Sogdiens en Chine*, Paris, 2005, pp. 363-375.
- B. Karlgren, *Grammata Serica Recensa*, Stockholm 1957.
- J. Lee and N. Sims-Williams, "The antiquities and inscription of Tang-i Safedak", *Silk Road art and archaeology* 9, 2003, pp. 159-184.
- V. A. Livshits, *Sogdian epigraphy of Central Asia and Semirech'e*, London 2015.
- P. Lurje, *Personal names in Sogdian texts*, (R. Schmitt, H. Eichner, B. G. Fragner and V. Sadoski (eds.), *Iranisches Personennamenbuch*, Band II, Faszikel 8), Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, 2010.
- , "Karluki i jaglakary v sogdijskoj numizmatike Semireč'e", *Tjurkologičeskij sbornik* 2011-2012, Moscow 2013, pp. 220-230.

- V. Minorsky, "Tamīm ibn Baḥr's journey to the Uyghurs", *BSOAS* 12/2, 1948, pp. 275-305.
- , *Ḥudūd al-Ālam. 'The Regions of the World.' A Persian Geography 372 A.H. — 982 A.D.* With the preface by V. V. Barthold. London. (2nd ed.: London 1970.)
- E. Rtveladze, "Pre-Muslim coins of Chach", *Silk Road art and archaeology*, vol. 5, 1997/98, pp. 307-328.
- , *Istorija i numizmatika Čača*, Tashkent 2006.
- R. Schmitt, "Der Flussgott Oxos in der iranischen Anthroponymie", in: E. Morano, E. Provasi and A. V. Rossi (eds.), *Studia Philologica Iranica. Gherardo Gnoli memorial volume*, Rome: Scienze e Lettere, 2017, pp. 413-426.
- V. D. Shagalov and A. V. Kuznetsov, *Catalogue of coins of Chach III - VIII A.D.*, Tashkent 2006.
- N. Sims-Williams, *Bactrian documents from Northern Afghanistan II*, London 2007.
- N. Sims-Williams et al., "Les plus anciens monuments de la langue sogdienne: Les inscriptions de Kultobe au Kazakhstan", *Comptes Rendus de l'Académie des Inscriptions & Belles-Lettres*, 2007, avril-juin, pp. 1005-1034.
- N. Sims-Williams and J. Hamilton, *Turco-Sogdian documents from 9th-10th century Dunhuang*, London 2015.
- O. I. Smirnova, *Svodnyj katalog sogdijskix monet*, Moscow 1981.
- F. Thierry, "Les monnaies de Boquq Qaghan des Ouighours (795-808)", *Turcica* 30, 1998, pp. 263-278.
- , "Sur les monnaies des Türgesh", in: M. Alram and D. Klimburg-Salter (eds.), *Coin, art, and chronology*, Vienna 1999, pp. 321-349.
- , "Three notes on Türgesh numismatics", in: Shanghai Museum (ed.), *Proceedings of the symposium on ancient coins and culture of the Silk Road*, Shanghai 2011, pp. 413-442.
- Y. Yoshida, Review of N. Sims-Williams and J. Hamilton, *Documents turco-sogdiens du IX^e-X^e siècle de Touen-houang*, *Corpus Inscriptionum Iranicarum, Part II, Vol. III/III*, London, 1990, *Indo-Iranian Journal* 36, pp.362-371.
- , "Additional notes on Sims-Williams' article on the Sogdian merchants in China and India", in: A. Cadonna et al. (eds.), *Cina e Iran. Da Alessandro Magno alla Dinastia Tang*, Florence, 1996, pp. 69-78.
- , "First fruits of Ryukoku-Berlin joint project on the Turfan Iranian manuscripts", *Acta Asiatica* 78, 2000, pp. 71-85.
- , "In search of traces of Sogdians 'Phoenicians of the Silk Road'", in: *Berlin-Brandenburgische Akademie der Wissenschaften. Berichte und Abhandlungen*, Band 9 (2002) pp. 185-200.
- , Appendix to V. Hansen's review article: "New work on the Sogdians, the most important traders on the Silk Road, A.D. 500-1000", in: *T'oung Pao* 89, 2003, pp. 159-161.
- , Review of Sims-Williams, *Bactrian documents from Northern Afghanistan. I*, Oxford, 2000 in: *Bulletin of the Asia Institute* 14, 2000[2003a], pp. 154-159.
- , "The Karabalgasun Inscription and the Khotanese documents", in: D. Durkin-Meisterernst, Ch. Reck, and D. Weber (eds.), *Literarische Stoffe und ihre Gestaltung in mittelpersischer Zeit*, Wiesbaden 2009, pp. 349-360.
- P. Zieme, "Mānistān 'Kloster' und manichäische Kolophone", in: Team "Turfanforschung" (ed.), *Zur*

lichten Heimat. Studien zu Manichäismus, Iranistik und Zentralasienkunde im Gedanken an Werner Sundermann, Wiesbaden, 2017, pp. 737-754.

和文・中国文

- アルラム, ミヒヤエル (宮本亮一訳) 「サーサーンからフンへ」 宮治昭編『アジア仏教美術論集 中央アジア I ガンダーラ～東西トルキスタン』東京, 中央公論美術出版, 2017, pp. 227-256.
- 斉藤達也「北朝・隋唐史料に見えるソグド姓の成立について」『史学雑誌』118/12, 2009, pp. 2106-2131.
- 「漢語文献におけるコートン(干闥)王族の姓氏—出土文献と編纂史料による再検討」『敦煌写本研究年報』10, 2016, pp. 357-370.
- 護雅夫「いわゆるトゥルギシュの銅銭の銘文について」『古代チュルク民族史研究』II, 東京1992, pp. 187-199 (初出は『三笠宮殿下還暦記念オリент学論集』1975).
- 森安孝夫「シルクロード東部における通貨」森安孝夫(編)『中央アジア出土文物論叢』京都2004, pp. 1-40.
- 「東ウイグル帝国カリ Chol 王子墓誌の新研究」『史艸』第56号2015, pp. 1-39 (横ページ)
- 『東西ウイグルと中央ユーラシア』名古屋2015a.
- 吉田豊「ソグド語の Nafnamak 「国名表」の2・3の読みについて」『オリент』36/1, 1993, pp. 151-153.
- 「ソグド文字で表記された漢字音」『東方学報 京都』66, 1994, pp. 380-271 (逆ページ).
- 「米國問題再訪」『アジア言語学論叢』4 (神戸市外国語大学外国学研究 第51号) 2001, pp. 163-166.
- 「研究ノート: ソグド人とチュルク人の接触に関するソグド語資料2件」『西南アジア研究』67, 2007, pp. 48-56.
- 「ソグド人と古代チュルク族との関係に関する三つの覚え書き」『京都大学文学部研究紀要』50, 2011, pp. 1-42.
- 「粟特語摩尼教文献中所見10至11世紀的粟特与高昌關係」『中山大学学报』2017/5, pp. 104-115.
- 吉田豊・森安孝夫・新疆ウイグル自治区博物館「魏氏高昌国時代ソグド文女奴隸売買文書」『内陸アジア言語の研究』第4号, 1988, pp. 1-50.
- 榮新江・羅豊「北周西国胡人翟曹明墓誌及墓葬遺物」, 榮新江・羅豊主編『粟特人在中国』上冊北京2016, pp. 269-299.